

続・サックリの分布図を読む

—新潟県に焦点をあてて—

福嶋 秩子

1. はじめに

本誌29号において、「サックリの分布図を読む」¹⁾と題し、裂き織りを表わす名称であるサックリ類の全国分布図を作り直すとともに、その表すものの分布図を作成した。この研究は、その後、①サックリ類とならぶ裂き織りの名称であるツズレ類にも注目し、サックリ類およびツズレ類の名称と指示物（その名称が実際に指し示すもの referent）の全国分布図を作成する、さらに、②横糸に古木綿布を裂いたものを用いる典型的なサキオリの他に、横糸に麻や藤などの素材を用いる織物もサキオリと呼ぶ事例があることから、多様な裂き織りの分類を元に全国分布図を作成する、という研究²⁾につながり、全国的な視野で変化の推定を行った。本稿では、全国分布を踏まえつつ、新潟県に焦点をあてて考察したい^{注1)}。なお、地図はArcGIS online (esri社) もしくはQGISで作成した。

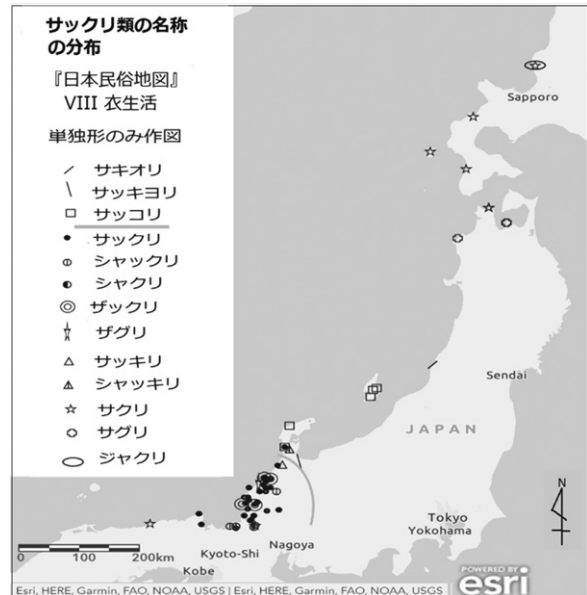


図1 サックリ類の名称の分布：『日本民俗地図』Ⅷ衣生活

2. 全国

2-1 資料

『日本民俗地図』Ⅷ衣生活³⁾を用い、サックリ類とツズレ類の分布を示す。図1-図4は参考文献²⁾から転載した。

2-2 分布

サキオリから変化したサックリ類は北陸に密で、日本海沿岸に分布するが(図1)、ツズレ類は東北地方から北陸、中国、四国、九州地方まで、内陸部も含め、広く分布する(図2)。サックリ類は裂き織りもしくは作業着(仕事着)の名称として使われる(図3)。一方、ツズレ類は裂き織りのみならず刺し子の仕事着やボロ布なども表す(図4)。

サックリ類よりツズレ類の方が分布が広く、様々なものを表わしていることから、名称としてはツズレ類がサックリ類より古いと考えられる。また、ツズレ類が刺し子の仕事着を表わすとする地点は、東北・中部・四国・九州に分布し、ツズレ類が裂き織りで作った仕事着を表わすとする能登(隠岐を含む)中国地方の分布よりも広く、前者の用法が古いと考えられる。

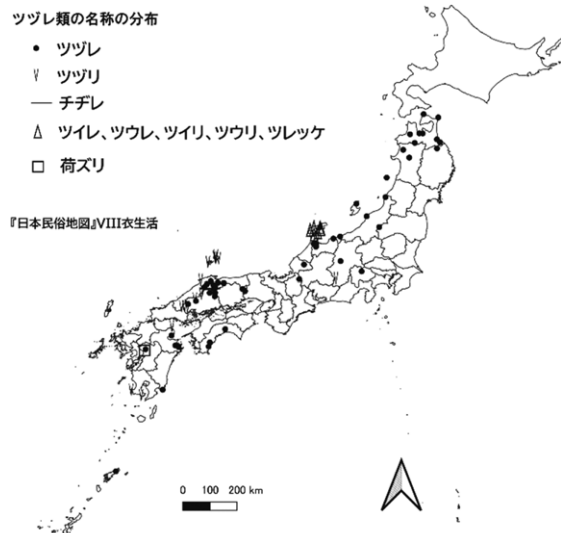


図2 ツズレ類の名称の分布：『日本民俗地図』Ⅷ衣生活

裂き織りで作った仕事着をツズレ類で呼ぶ地点が日本海沿岸に集中していることから、日本海航路により広がったと考えられる一方、同じく日本海側に分布するサックリ類は、北陸から主に北に広がっている。上記のツズレ類の分布はサックリ類の分布で分断されているように見える。



図3 サックリ類の指示物の分布：『日本民俗地図』Ⅷ衣生活

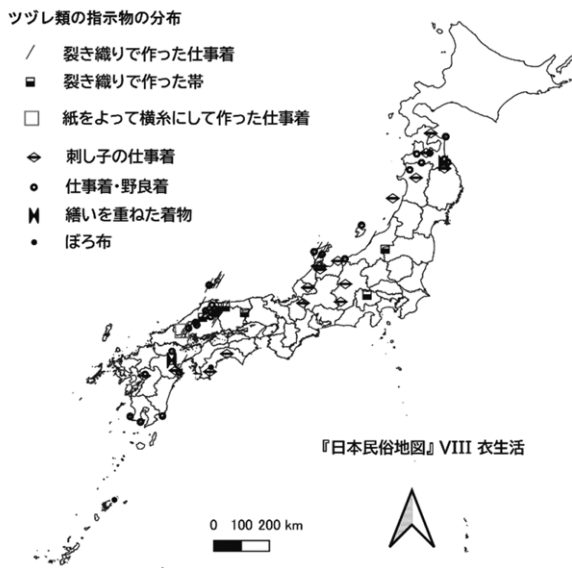


図4 ツヅレ類の指示物の分布：『日本民俗地図』Ⅷ衣生活

3. 新潟県

3-1 資料

『日本民俗地図』Ⅷ衣生活 では裂き織りに言及する新潟県の調査地点が少なかったため、以下の2点の資料も用いた。

- ・『山崎光子民俗服飾コレクション』⁴⁾
- ・佐藤利夫『裂織 木綿生活誌』⁵⁾

『山崎光子民俗服飾コレクション』を出典とする地図化にあたっては、裂き織りや刺し子といった技法に注目して整理した。図5・図6は参考文献⁶⁾から転載し、図7は新たに作図した。

3-2 新潟県の分布

裂き織りを用いた衣服もしくは織物の名称としては、サックリ類の名称であるサケヨリが佐渡にあるだけで、越後では(刺し子を連想させる)サシモンやツヅレなどが使われている(図5)。この図において、佐渡および対岸の角田山裾と山北の海沿いにしか分布していないのは示唆的である。一方、刺し子を用いた衣服もしくは織物は、内陸部を含むより広い地域で使われていて、様々な名称で呼ばれている(図6)。図5のサシモンはサシコから来ているだろうから、刺し子に代わって裂き織りの技法がとりいれられても、変わらず旧名称のサシモンで呼んでいたであろうと推測できる。全国分布において、ツヅレ類の名称が裂き織りで作った衣服に用いられていることも同様に説明できよう。

なお、図5で裂き織りをツヅレと呼ぶ角田山裾の海沿いの集落と、同じく裂き織りをツヅレと呼ぶ能登(図2および図4参照)との関係性については、山崎光子が1989年にすでに指摘している⁷⁾。能登からの人の移住にともなって裂き織りが越後へと伝えられたそうである^{注2)}。



図5 新潟県における裂き織りを用いた衣服もしくは織物の名称の分布：『山崎光子民俗服飾コレクション』



図6 新潟県における刺し子を用いた衣服もしくは織物の名称の分布：『山崎光子民俗服飾コレクション』

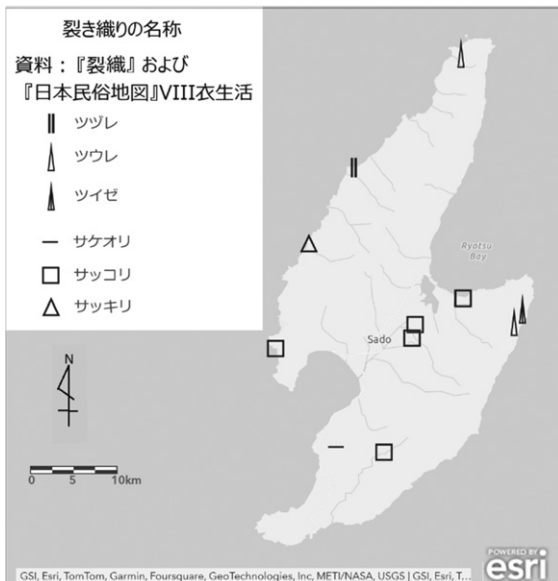


図7 佐渡における裂き織りの名称の分布：
『裂織』および『日本民俗地図』VIII衣生活

3-3 佐渡の分布

『裂織』および『日本民俗地図』VIII衣生活を用いて、佐渡における裂き織りの名称の分布図を作成した(図7)。記号は、図1・図2で使われている記号との類似を意識して選んだ。かなり離れた二ヶ所に分かれて分布するツツレ類(ツツレ、ツウレ、ツイゼ)と、国中平野を中心に分布するサッキリ類(サケオリ、サッコリ、サッキリ：ただし、サッキリはない)が対立的な分布を示す。地図化をしなかったが、『日本国語大辞典』⁸⁾には、『佐渡海府方言集』(1944発行)でサキオリとサッキリ^{注3)}、『佐渡方言集』(1909発行)でサッコリとあった。ツツレ類はでてこないものの、サッキリ類の分布については図7の分布と比べておかしくはない。

佐渡においてはツツレ類からサッキリ類への変化が起こったと考えられるが、これは全国分布で想定された変化と矛盾しない。

ツツレ類において、ツウレは能登にもある語形であり(図2参照)、ツツレ>ツウレが佐渡で起こった変化とは限らず、ツウレが能登から直接入った可能性がある。一方、ツイゼは、ツイレ>ツイデ>ツイゼと佐渡で変化したと考えられる。サッキリ類について、図1の全国分布からサキオリ>サケオリ>サッコリ>サッキリ>サッキリという変化が起きたと解釈した²⁾。サッコリからサッキリへと直接的に変化することは考えにくいので、サッキリも外から入ってきた語形だろう。なお、図1でサッキリは能登半島のつけねあたりに分布している。

日本海航路を通じての大きな変化と、佐渡と能登を直接結ぶ交流との両方が関与して、このような分布ができたのではないかと考えている。

4. まとめ

本誌2号掲載の山崎光子会員の論文⁹⁾にあった北陸のサッキリの名称と素材の分布図に端を発し、足かけ三年、裂き織りに関係する全国分布の調査はサッキリ類からツツレ類まで広がり、サキオリと呼ばれるものが実は麻や藤など伝統的な素材を横糸にして織ったものから始まっていたことなどが確認できた。全国分布から新潟県の分布にいたったところで、この研究も一段落ということにしたい。

参考文献

- 1) 福嶋秩子；サッキリの分布図を読む；新潟の生活文化 No.29；pp.7-10；2023
- 2) 福嶋秩子；裂き織り・サッキリの分布図を読む—名称と指示物の分布、多様な裂き織りの視点から；国立国語研究所論集 第27号；pp.77-93；2024 <http://doi.org/10.15084/0002000279>
- 3) 文化庁編；日本民俗地図VIII衣生活；文化庁；1992
- 4) 新潟県立歴史博物館編；山崎光子民俗服飾コレクション；新潟県立歴史博物館；2010
- 5) 佐藤利夫；裂織 木綿生活誌；もの与人間の文化史128；法政大学出版局；2005
- 6) 福嶋秩子；新潟県における裂き織りと刺子の分布：名称と指示物；第97回新潟県方言研究会情報交換；2024.3.31
- 7) 山崎光子；サッキリの通った日本海の道：越後のツツレと能登のツツレ；日本海を考える富山シンポジウム実行委員会編 日本海文化研究；pp.9-35；1989
- 8) ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』
- 9) 山崎光子；サッキリ文化の変容：三国を中心としたサッキリの分布と系譜からみた；新潟の生活文化 No.2；pp.20-25；1995

注

- 1) 本稿は、2024年11月3日に行われた新潟県生活文化研究会令和6年度年次大会における筆者の研究発表に基づいているが、図7については、『日本民俗地図』VIII衣生活のデータを加えて作り直した。
- 2) かつて原子力発電所の建設予定地となり村民が離村した角海浜が、能登から伝播した裂き織りの中心地ではなかったか、と山崎は考えている。
- 3) 手元にあった『佐渡海府方言集』(国書刊行会1977発行)によると、サキオリという見出しの下に、「サッキリ又はサッコリともよぶ」とあった。図7で内海府のデータがないので、サッコリが内海府まで広がっていたのかもしれない。